

令和元年度 事業報告

令和元年度 事業報告書

5月に新元号、令和を迎え改元に伴うゴールデンウィーク10連休は観光産業界にとって好スタートがきれた年となった。加えてワールドカップラグビー日本大会の開催によって欧米豪の出場国からの訪日客が大幅に増え、地方への訪日誘客促進に繋がったイベントであった。

平成28年3月、政府策定の「明日の日本を支える観光ビジョン」の目標2030年訪日外国人旅行者数6000万人、訪日外国人旅行消費額15兆円の達成のため、「観光が、真に我が国の成長戦略であり、地方創生の大きな柱である」との認識のもと毎年アクションプログラムを行動計画として打ち出している。

政府はオリンピック・パラリンピック東京大会が開催される2020年にインバウンド4000万人の目標達成に向けての「観光ビジョン実現プログラム2019」では、多言語対応や無料Wi-Fi、キャッシュレスなどの受入環境整備、国立博物館・美術館の夜間開催、寺泊・城泊、スノーリゾートの再生など、地域の新たな観光コンテンツの開発を日本政府観光局より海外に一元的に発信することを主要施策として上積みを図っている。

昨年2019暦年のインバウンドは前年比2.2%増の3188万2千人*となり、7年連続で過去最高を更新、地域別でも韓国を除く東アジア、東南アジア、豪州・北米、欧州共に過去最高となったが、韓国の対前年25.9%減の影響で全体の伸び率は小幅に留まった。

一方、旅行業界にとって悲願であった日本人の海外旅行者（アウトバウンド）数、2000万人は、政府目標を一年早く達成し前年比5.9%増の2008万6百人*となったが5年連続でインバウンドがアウトバウンドを上回っており、依然として均衡がとれていない状況が続いている。

(*出典 JNTO)

双方向の交流、いわゆるツーウェイツーリズムの拡大のためにも若者のアウトバウンド活性化が望まれている。

日本列島の宿命であるかのような自然災害、6月の山形県沖地震、8月の九州北部豪雨、9月観測史上最強クラスの勢力で房総半島を中心に甚大な被害をもたらした台風15号、10月の台風19号では千曲川の決壊等関東以北に相次いで直撃し令和元年東日本台風と命名された。また10月31日の沖縄首里城正殿の焼失、などの災害が発生し国内観光は大打撃を被るとともに風評被害も発生した。一方、7月のユネスコ世界遺産に百舌鳥・古市古墳群が登録されたことなど地方が脚光を浴び地域の文化が観光にとって、明るいニュースとしてもたらされた年であった。一方好調なインバウンドを受け入れるため宿泊業における外国人材の活用のため4月に創設された在留資格「特定技能」制度のもと技能測定試験を実施し外国人材の受け入れを進めようとしている。

このような行政ならびに観光産業界の動きによって、真に観光の時代の到来との認識のもと当協会としてはまさに力を結集し、日本の観光に役に立ち、観光関係団体や会員にも役立つ活動を行うべく、会員が保有する知見を活かして義務でなく参加し会員企業ならびに社会に対して価値の創造につながるCSV活動を推進してきた。

その成果を国際ホテル・レストラン・ショー2020(会場：幕張メッセ)での協会特設ブースにおいて、テーマを「日本のこころ」として技術者集団ならではの展示をおこない協会活動を広く社会に広報した。

このように、多様な観光交流空間を視野に入れた領域の調査・研究・提言、評価に事業の幅を広げ、観光関係の公益社団法人として観光交流空間のハード分野の側面を担いつつ、わが国の観光業の発展に努めている。

令和元年度はこのような内容をもとにして公益社団法人として主に下記の活動を行った。

1. 技術委員会・各分科会の事業活動については、
 - (1) 平成28年度から始まった観光庁宿泊業の生産性向上推進事業を踏襲し日本旅館協会、全旅連との共催による「エコ・小地域セミナー」水光熱費削減4つのヒントを富山県で開催した。また日本旅館協会と共同でホテルズ2020の会場でエコ・小相談コーナーを開設し宿泊業運営者からの相談に応じた。
 - (2) 国内産の木材を活用して観光振興に役立たせることを目的にイベント管理用木柵「Ki-Saku」の発表と普及活動を行った。東濃のヒノキを使用した「Ki-Saku」の岐阜版、小田原・箱根山の杉を使用した「Ki-Saku」の小田原版がそれぞれ、いびがわマラソン、箱根駅伝で一部試用された。加えてフェーズフリーの発想のもと「サイモルポート」が非常時にトイレになる案をホテルズ展で提案した。
 - (3) バリアフリー法改正に伴う宿泊施設の運営側に求められる車椅子利用者対応の客室整備に対し、一般客室でも対応できる電動車椅子の改良版を会員企業の協力のもと提案し、ホテルズ2020の会場で実機によるデモを行った。
 - (4) 人手不足に悩む旅館の生産性向上に資する方策として厨房から食事処までの料理の運搬のためのITワゴンの改良版を会員企業の協力のもと提案しホテルズ2020の会場で実機によるデモを行った。
 - (5) 滞在して楽しい観光づくりを念頭にしたセミナー、施設見学の開催
 - (6) 日本の伝統的な空間の意匠と工法、またその使われ方を松涛美術館と旧前田侯爵邸を調査分析し日本の伝統工芸・文化を見つめ直し、新しい方向性に向けて研究をおこなった。
 - (7) ホテル・旅館の耐震性を確保するために、合理的な耐震改修について診断・改修の手助けとなる助成制度の調査と耐震改修の事例収集をおこなった。
2. 技術委員会の活動で得られた観光交流空間に関する情報を技術の見地から外部出版社の発行する情報誌に観光施設メディアラボと題して継続して連載を行った。
3. 広報委員会は、情報誌「観光施設」を年間4回発行、新たに表紙とレイアウトを見やすく改編してその内容の充実を図った。

ホームページの閲覧度を高めるべく、より効果的に情報伝達することに努め、広く観光界及び関連分野にむけて協会活動のPRを行った。
4. 事業委員会及び交流部会各部会においては、施設見学会・セミナー等を実施し、最新の観光施設に関連した内容を会員ならびに一般に紹介した。
5. 委員会・分科会・部会活動の連携と調整を図るため、合同の会議：創造委員会を開催した。
6. 建築・設備・インテリアの3部会から成る「交流部会」を中心に、会員相互の情報交流を深めた。
7. 第48回国際ホテル・レストラン・ショーについては、フード・ケータリングショーおよび厨房設備機器展と併せて3展合同開催を実施した。当協会としてはここ数年継続して『総合テーマ：日本のこころ』と銘打って8つのテーマ展示、①匠のこころ ②旅する

こころ ③木づかいのこころ ④エコ・小のこころ ⑤巧のこころ（新UD 客室研究） ⑥巧のこころ（Ai 研究） ⑦そなえのこころ（耐震研究会） ⑧もてなしと観光資源を探る（交流部会）の展示を行った。中央オープンステージでは、16のセミナーを開催し、加えて特設会場でのホスピタリティデザインセミナーでは訪日外国人観光客を迎えるホテル・旅館のホスピタリティデザインに焦点を当てた事例を取り上げて来場者の関心を集めた。

8. 総務委員会は、協会の活動内容を「協会だより」としてとりまとめ、会員に送付した。